



014565-000-8

特29-1

羽黒山千三仙人伝

三山神社々務所／編

M39


ABB-0980



特29

1


 遊山
 水鴻
 鷺兄
 姪是



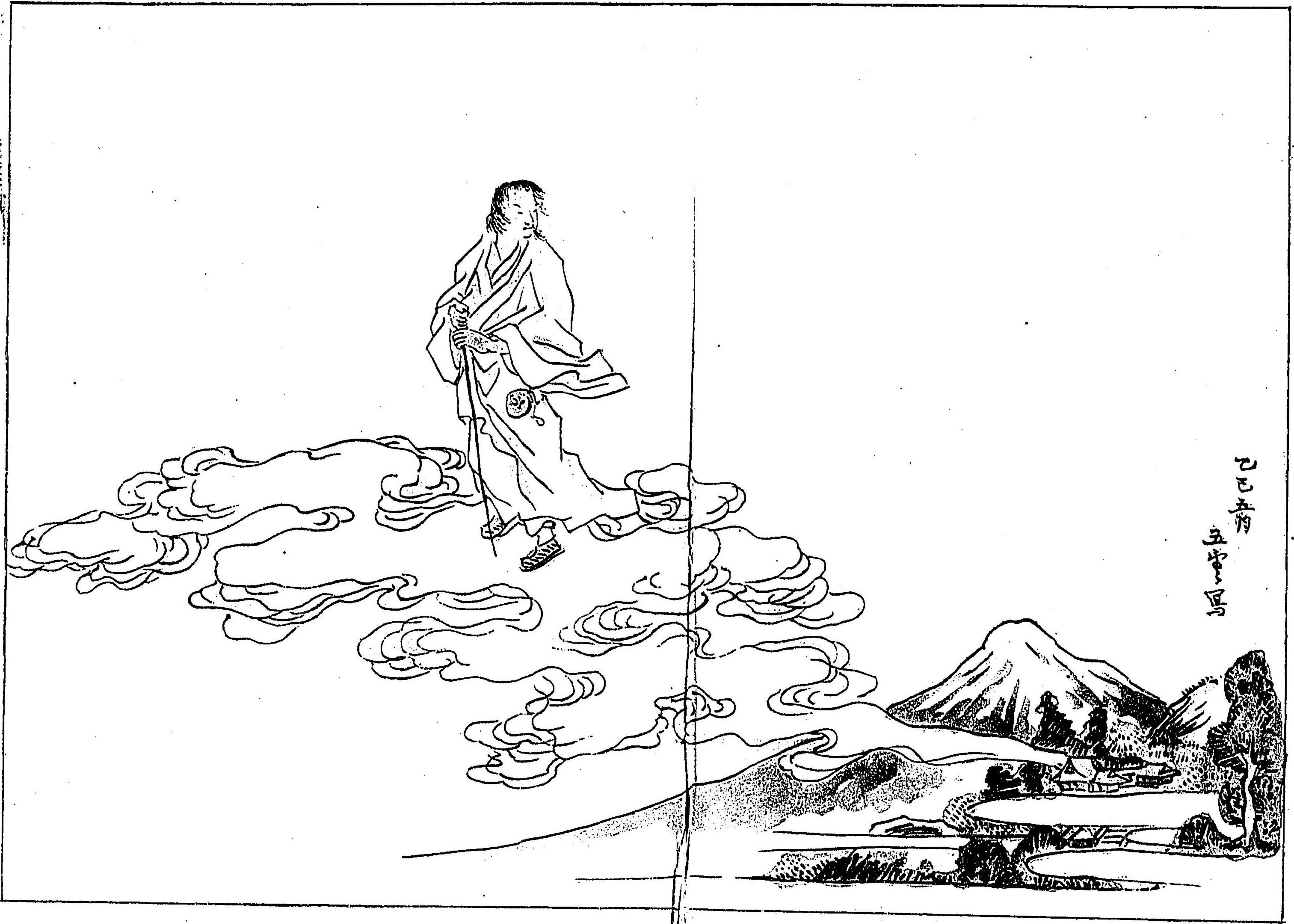
自古任神僊
 天靈蹟傳叱石
 已陳舊代耕扶
 新篇

松門山人白晝題





明治
 39 8 8
 内交



己巳年
五月廿四日

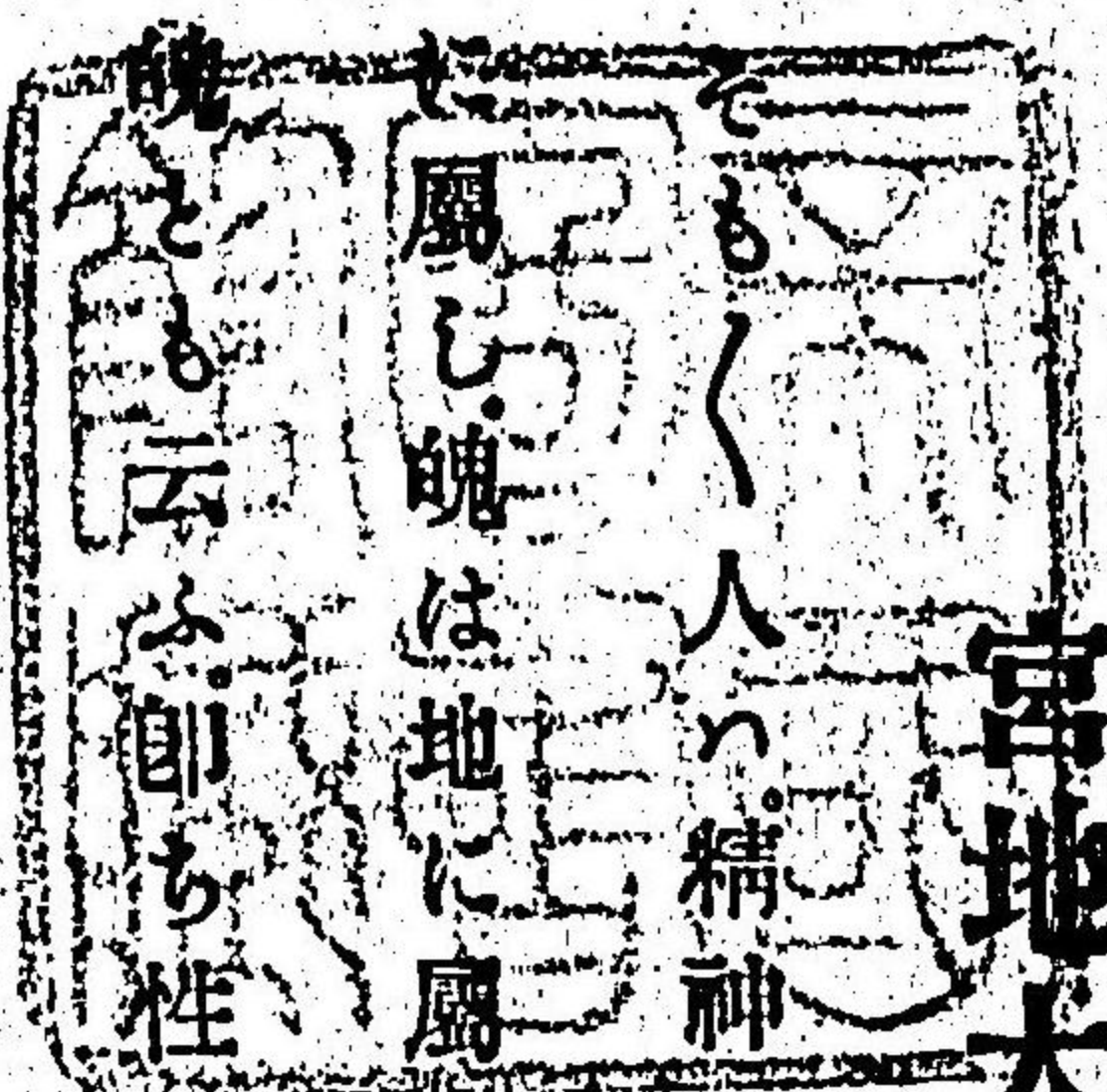
附言

一この書の三山神社窪田宮司客年五月上京の際宮地殿夫大人の
收蒐せらるゝ本朝神仙傳の内ある羽黒山千三仙人の傳記を大
人自ら抄寫せられ見せられたるを宮司の請ひ受け持ち來られ
たれば古來よりの傳説に炳じき羽黒山天狗なるものゝ眞諦を
悟らん参考よもご刊行して同好の人に頒つてせり

二この書中に挿入せし圖繪ハ窪田宮司の令甥窪田五雲主の清雅
艶麗なる筆に成れるものを惠贈せられたるものなり

一本編の妙境なる趣味を深からしめん爲め宮地大人の心魂に關
する高話を大人に請ひて卷首に添載せり

宮地夫人乃心魂に関する講話



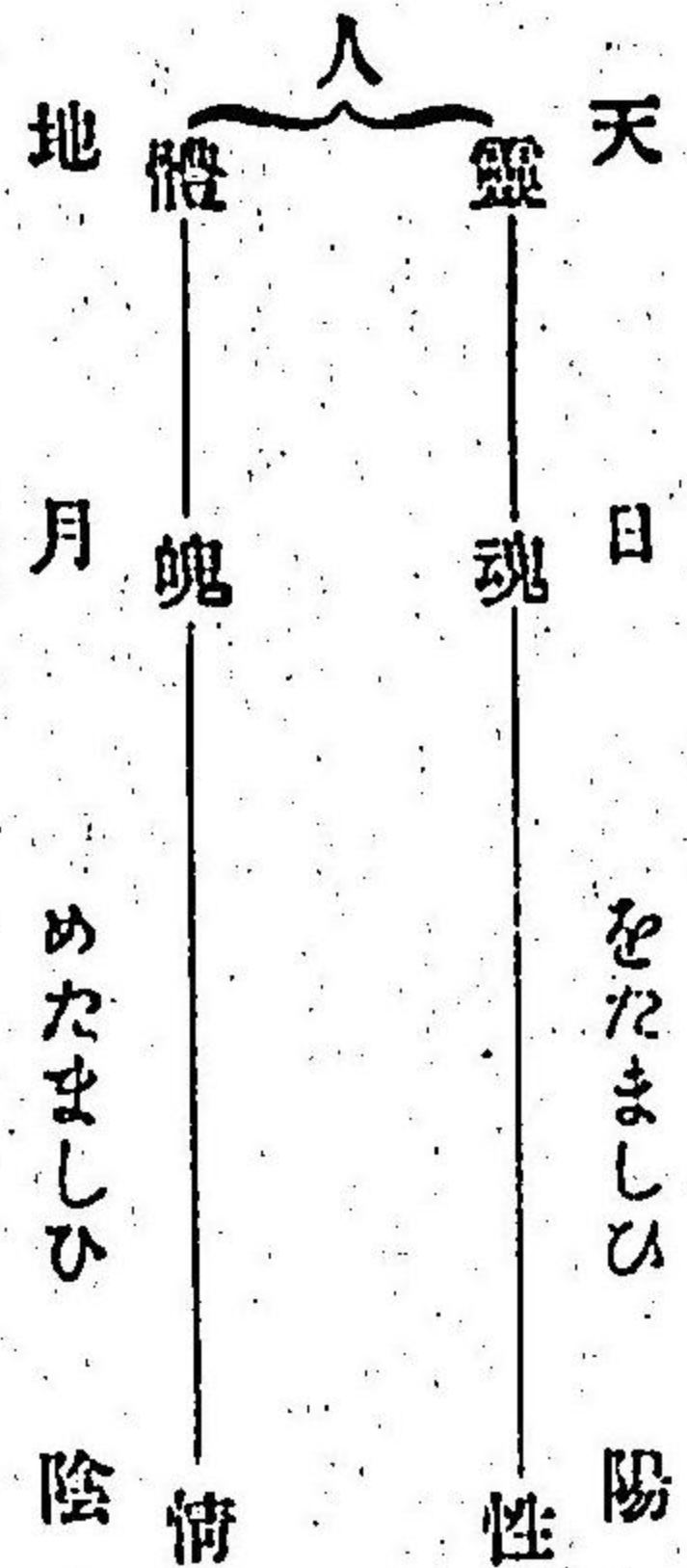
もく 人の精神と肉體とを以て成れるものなり。故に魂魄あり。魂は天
に屬し。魄は地に屬す。是を以て天魂地魄と云ひ。また日魂月魄とも。陽魂陰
魄とも云ふ。即ち性と情と是れなり。人若し此天魂地魄の妙用を會得し。常

に性を以て情を制し。日魂を養ひ。月魄を鍊り。陽魂を主として。陰魄を御す
る時は。行ふとして。道に適はずと云ふことなく。爲すとして。善にあらずと
云ふことなく。遂に純良至粹完全無缺の精神となりて。宇宙の大神靈と感
合一体となるに至り。神仙得道の域に達するものなり。是に於て。聊か人身
の本原を述むに。肉體も土と水との二種よりなれるものなり。靈魂も火と
風との二種よりなれるものなり。何を以て是を知るかと云ふに。人の生け

る間は温ユヅカにして動くものなり。温なるは火氣にして、動くは風氣なり。故に人の生ける間を「イキテ居ル」と云ふ。イイの轉訛にして、其實「火ヒ來て居る」と云ふの意なり。また「イノナ」の「火ヒの内ウチ」を意味し、死るは火ヒ往るよて、火ヒの去るイと云ふの意と知るべし。我國語にヒと呼ぶもの三ツあり。即ち日ヒ、火ヒ、靈ヒの三ツにして、皆照らし温むるの徳を具へ、生成化育を主るものなり。爰に知る靈魂は人身中に來り寓りて、之れが主宰をなすものなり。雖も其元大陽天日に屬すへきものよしして、實は天日の微分子たるものなることを。其天魂日魂等の名の、小縁のこととあらざるを知るべし。また肉體の水土の二種より成れるものなるに於けるも、彼の火ヒ去て靈ヒ去りたる後の肉體は、如何に成ゆくものなるか。皆水土の二種に復ること、事實の證明する

所なり加之人身の生るゝは、母の胎内にやどり、十ヶ月即ち二百七十五日餘の時間を経過して、始めて出産することを得るものなり。而して其母の子を孕むは、全く月經に關係あり。月經はまた月の大地を一周する時間、即ち二十七日と二十五刻にして、必は來るものなり。故に月經の名あり。且人の子の生るゝも、また人の身の死るも、潮の干満に關係ありて、子は潮の込ウチと時にあらざれば、生るゝ事能はず。また人の身は潮乃引き時にあらざれば、死ぬること能はず。潮はまた月の大地を旋回するに因りて、干満をなす。肉體の月及び大地に關係あること、斯の如し。彼地魄月魄等を名も、亦小縁のこゝよ非ざるを知るべし。然れば、人は天地の精神、日月の靈徳の結合して成れるも、乃なり。其貴重よして、萬物の靈たることの、偶然にあらざるを

知るべし。今此れが圖を作りて其要妙を示すこと左の如し。



性を以て情を制するものなり。道を得て善人とある。

情を以て性を抑ゆるものなり。道を失ひて悪人とある。

斯の圖れ如き。至神至靈の妙理を以て。成立したる人間なれば。其道を修むるもの。必ず得道の身となること固より云ふを待たず。是を以て。特り我國のみならず。支那。印度。及び泰西。此賢哲も。亦皆此道を求むるは法を説かざるもれなし。即ち道家の修鍊法。佛家乃座禪。哲學家乃エキスターズ乃類乃如き。皆此道を求むる乃法にあらざるはなし。道士の坐忘中。其陽神を出して。皇天上帝に黙朝し。無何有の郷に遊ぶか如き。また佛者の定に入りて。

天眼通。天耳通。他心通。神境通。心境通。宿信通。等の六神通を得て。内ハ肺腑を見。外ハ鬚眉を見。又廬舎を出でずして。未來の事を知り。身室内に居ながら。牆を隔て。物を見。又地理山河。掌上の紋を観るが如くになり。又十方の音を聞くこと。耳邊の音の如く。生前の事を憶ふこと。眼前の事の如くになり。また上ハ天上の事を見。下ハ地下の事を見。無數宿命の更る所を見透すに至り。また神通變化自由自在にして。他の心内なる隱微の事までを覺ること云へるもの。類の如き。皆性を以て情を制し。魂を養ひて。魄を鍊り。我靈魂を以て。宇宙の大神靈と感合一體ならしめたる。結果にあらざるはなし。其妙云ふべからず。此を道家佛家得道の大要とす。而してまた西哲フロタンの法あり。エキスターズ即ち此れなり。其梗畧凡左の如し。

道を求むるもの。

先 世務を断つ

次 情慾を断つ

次 感覺を断つ

次 意象を断つ

次第を追ひ順序を経て此の四ツを断つ時ハ心頭一点のものをだも止めず即ち八面玲瓏歡天喜地の妙境に入る此即ちエキスマーズなり譯して大死一番の境と云ふ此田地に至りて始めて我靈魂と宇宙の大精神と同一物たることを覺り且我靈魂ハ宇宙の大神靈の微分子たるを知ることを得べし然れども爰にまた二説あり即ちミスナジスムとパンテイイズ

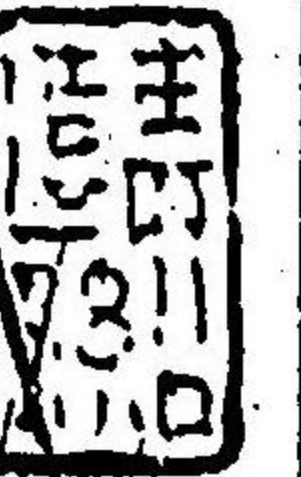
ムとにしてミスナジスムは神人感合説と譯しパンテイイズムハ神物一
體と譯す皆道を求むるの要説なれども其説冗長に渉るを免かれざるを
以て今之れを畧す

羽黒山寺三仙人傳

羽黒山の仙人の、其名を千三郎と云ふ。父の彌助、母の名群
ならず。元陸奥國北上三本木の人あり。始め彌助、男子二人
あり。兒を喜之助と呼び、弟を千三郎と稱す。家貧あるて、二
人を養育すること能はず。千三郎を、伯樂の家へ遣とし
ひる。或日、千三郎歸り來りて云ふやう。己の伯樂を業と
して、世を渡らむ事好まむからねと、外の業も、就む事を
許さ給へと云へるを。彌助聞けも入れず、一度、人の家へ行きた
者の歸る事やある。片時も、我家へ置く事ならず。疾く行け、
と云ひたまは云ひければ、千三郎、いむをの返答もせず、いつ



五



くごもなく、出失せけり。此時、千三郎ハ、十三歳までありけ
 るとぞ。其後彌助、身まかり、喜之助一人となりけれを、妻を
 迎へて、松市と云ふ男子を設けおの、間もなく、喜之助も、病
 む罹りて、世を去りけり。妻となり者、辛うじて幼き松市を
 育てあげしが、松市が十五歳の時、重き病を罹りて、身動き
 ならざれば、松市、人ふ雇われあごして、僅りの金銭を得て、

母を養ひたりしお、折しも、天明
 度の飢饉あひて。富めるものす
 ら、口を養ひかねたるに、いかで



幼き松市が手一ツにて、今日を暮すべき。殆んど餓死せむ、
とするに至りぬれど、外に働くべきすべも、あらねど、朝夕、
木の葉、草の根をこりて、母子命をつなぎ居たりしも、日を
経るまゝに、近き野山は、我一人からねば、食ふべき程の、草
葉は、取り盡しければ、如何せん、案じ煩ひて、とある山に
入りて、何ぞがなと、あさりあたりしに、何處よりか、年の頃
二十五六ばかりの男の、白き衣着たるが来て、汝の喜之助
の子、松市あるかと云ふ。松市、いかなる人あれば、我名をさ
へ知りて、斯くの云ふあらん、奇しみながらも、然ありと、
答へしかを、彼男、我は汝が叔父の、千三郎あり。此頃、汝獨り
母と養ひかねたりと聞きて、不便さに堪へか、暫し師と暇
と乞得て、爰には來つるなりと云ふ。松市も、叔父の事、母
より聞きたりし事なれば、いと嬉しくて、來し方のうき事と

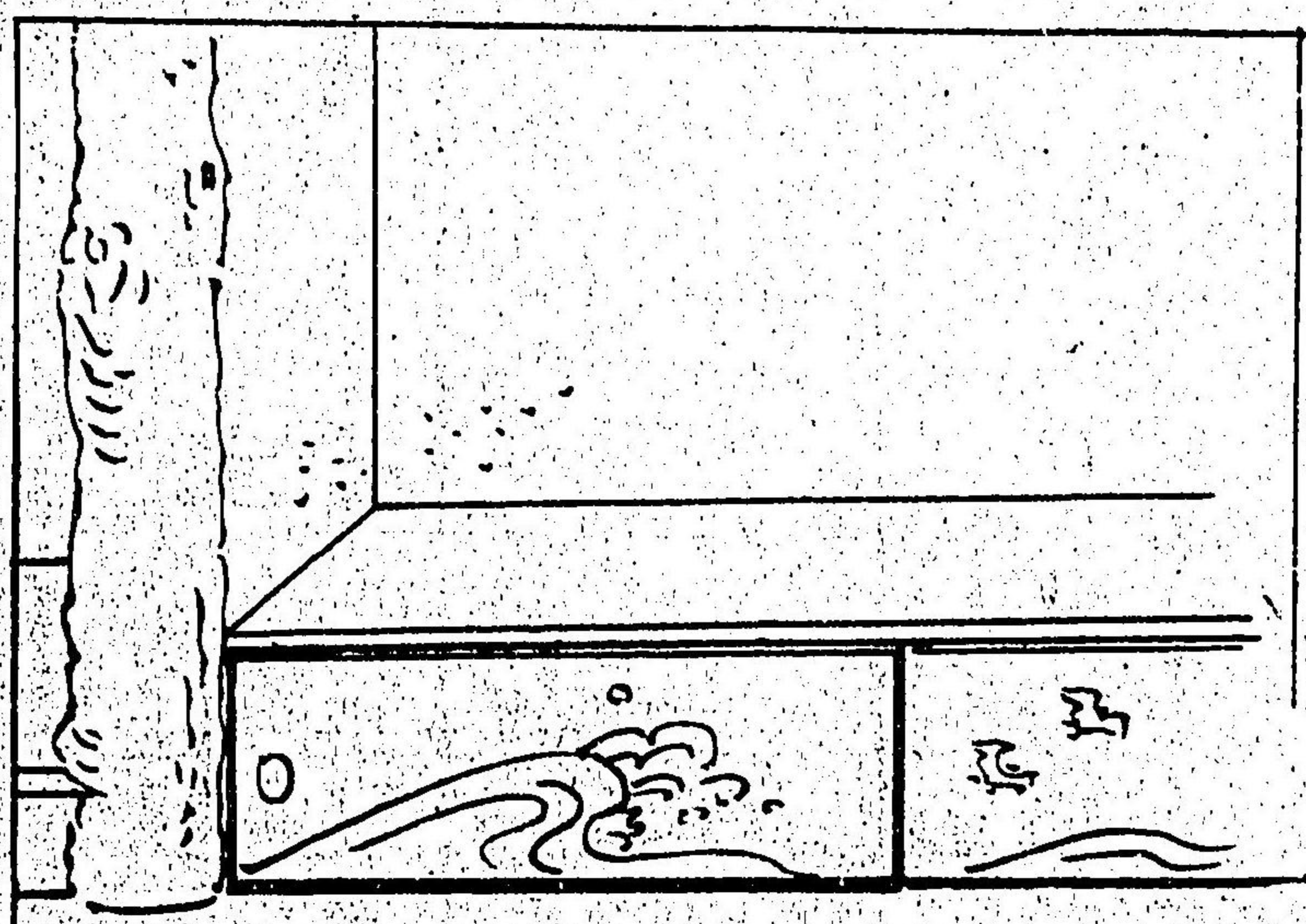
もと語り、今日よりは、我世渡りに、力と添へ給されと云ふ
にぞ、千三郎涙とこほして云ふやう、我は、十三の年、家と出
で世渡るべきたづきもがなと、彼方、此方、行き廻りしが、思
そざる縁みて、出羽國の羽黒山に登り、手習學問してあり
しが、よき師と從ひて、二十五の年、此人間界とはなれたれ
ば、今、汝に施すべき物とてなし。越後の新潟に、頼むべき家
あれば、汝と其家に、伴ひゆかん。汝其處にて、まめくしく
働きなば、家と興しつべし。いさ、今よりゆかむと云ふ。松市、
そいさよき事なれど、今、仰に隨ひて、遠くゆきなば、母獨
り餓死ぬべし。されば、此仰に、隨ひ難しと、云ふと、千三郎
聞きて、汝が母と、我ともかうもして、養ふべければ、うしろ
聞きここのなし。暫く、母の側をはなるとも、歸りて後、安



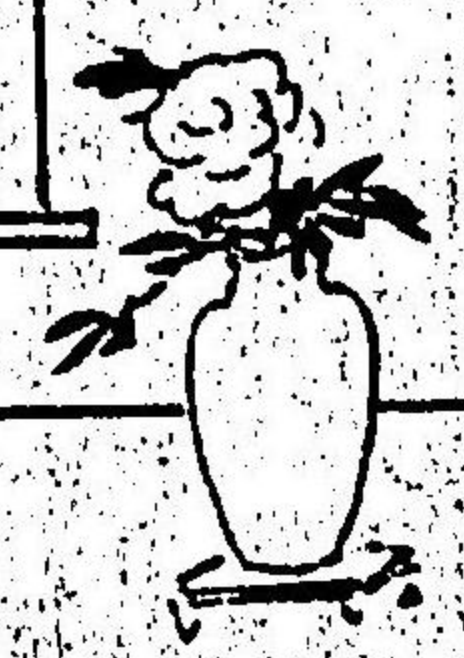
樂せさせむおと、大なる孝こ、云ふものならめ。といふよぞ、
 松市心れちるて、さらばこもかうも、仰も随もむこて、猶、來
 し方、ゆくさきのこと、も、語らふ程よ、眠りを催し、暫しま

ごろみぬ。松市夢覺めて見れを、朝
 の五ッ頃よて、見も知らぬ家の一、
 間み居り、彼の叔父も居らず。あた
 りを見まはし、隣坐敷を窺ひ見れ
 を、旅人こたぼしきが、此家お宿り
 たるが、外おと男女の聲々、いと賑

五電

現権天黒



十

はし。戸を開き見れど、戶外をやがく、街道にて往きかふ人、ひきもきらず。松市思ふやう、我の狐あたぶらかされたるなり。かの叔父と云ひし者こそ、狐あてありしかと、腹立ちしく、且、悔しかれど、今更、何ともせむすべなし。されど、爰あかくてあらんには、盗人と、見あやまられて、打ちもや殺されむ。逃げ走らんよ、も、道と知らず。とやせん、かくやせんと、案じ煩らひたるに、人の入り来る音すれを、如何せんこ、思ひしに、男一人、側近く寄り来て、奥州三本木の、松市こそ、とぬしなるか。我も、米問屋の番頭なり。いざ、俱み参らむと云ふ。松市更に合点ゆらず。先我が身の上の一部始終を語らず、猶此上おも、いかなる禍わざあ、かゝらんもあらずと思ひて、今までの事ども、残る處なく、語りなれど、彼男、いと怪し

み、世みひふしぎの事も、あるものなり。とぬしが云ふ所、よも偽りにい、あらざるべし。抑、とぬしの事、一日、出羽の羽黒山より、あかくの者あり。心へよく、孝心深き者なれど、貧おせまりて、母を養ひかねたり。二人の命を助けんと思ひて、召しつかひくれよと、便につけて、仰ありしが。今朝、まゝとぬし、此宿に來りをれば、迎へこりてよと、飛脚あて、申越されぬ。何ともあれ、先我方あ來給へ、主人の考もある可しと云ふに、松市も、少しは心落ちつきて、さらば参らんとして、俱みゆきけり。此家も、大なる問屋にて、人あまた、つかひたるかどし。暫くありて、主人、居間に呼び入れて云ふ。汝爰に來ることは、我年頃信仰する、羽黒山の神の御はからひに外ならず。されば、ゆく々憐愍をかけて、めし遣

ぬべし。汝も亦、忠實に勤めよと、懇なる主人の詞に、松市、不思議の縁にて、此家に參ること、全く神の御はらひなるべし。身愚なれば、御心には叶ふまじけれと、力のあらむ限りは、勤め申すべしと、約し、それより後、晝夜怠りなく勤め、數多の朋輩とも、仲違ふやうの事もなく、殊に此地を、遊女多くありて、それが爲めに、身をそこなふ者、すくなからぬに、松市さる方には、足もむけぞ。只管、主家大事と、のみ思ひて、勤めければ、松市が働きにて、主人も少なうらぬ利徳を得ければ、取分け寵愛し、松市が來しより、十三年の秋、此地に何ありとも、思ふ所の商買を、營むべしとて、相應の元手と與へ、故郷なる母とも、迎へ來よと云ひ聞かせければ、松市悦び身に餘り、主人の情けの云ふも更なり。世を捨て

し叔父の惠み、羽黒の神の御はらひの、忝けなさど。天を拜み、地を拜みて、それより、旅の用意して、我故郷へ出立けり。斯くて三本木の里にては、松市獨り、母の看護怠りなきも、飢饉と云ふ大厄にかゝり、日々野山に入り、木葉、草根と取り來て食せしが、其草の中に、あやしき物ありて、其根、一度喰へを、氣力を増し、二三日物を、食とさるも、うゝる事なく、又病める者も、自然に平愈せり。此草は、松市より外には、知る人更あなし。此草の功よりて、母子共、飢をまぬかれ、一日、二日と暮す程に、いつしか世も、賑そしくなり。母の病も、快くなりよければ、母子共に、かせぎて、後には他人の、田地を借りて、農作を營み、今日、明日の事には、こまらぬをかりに、成りにけり。一日、松市いつもの如く、田にゆくと



五
眞



て、朝早く家を出でしに、晝すぐれども、歸り來ねば、いかゞ
若つらんと、母獨り案じゐたるに、松市、美々敷旅装にて、歸
り來り、先年家を出でしより、十年餘り、音信もせざりし罪を
こび、其後の事を尋ね問ふに、母、顔色改變へて、こぬしは、今
朝、田よこそゆきつれ。何さてさる事といふ。狐の注だたる
か。但しそ、年頃の苦勞積りて、狂氣あて其衣類も、盗み來り
しならんか。あなあさましの我子やと、腹立ちいふも、松市、
さら／＼合点あらず。猶來し方の事共を語れと、母も又、あ
りし事を語るも、互ふ聞く事、云ふ事、喰ひ違ひて、果しなし。
母、近邊の者を始め、村の名主をさへ、呼び來て評議すれど
もいづれを正しとも、辨へかたけれと、先何より、田作りあ
行きたる松市を、呼び來よとて、若き者ども、ゆきて尋ぬる

に、影だま見えされと、尙手をどかちて、所々尋ねあるけど、
なふと、松市が影を見きと云ふ人もなし。されば今は、けふ
歸りし松市を、實の松市と定め、今朝までありし松市は、叔
父千三郎が、羽黒の神に祈りて、實の松市が、越後より往きし
により、其代りに、假りの松市をつくりて、母を養はめし
ものならむとて、評議の末を結びけり。されば、松市の、先
何とさて置き、早く叔父あ逢ひて、其後の事を語りもし、聞
きもして、禮どもいもんためあ、羽黒山あ、上らむと云ふに、
名主等聞いて、其の然るべき事なり。あるし、こぬし獨り往
きて、又、何か事あらんとき、其証據なるべければ、誰か
人を伴ひてゆきねとて、心き、たるもの二人を撰びて、松
市あ伴はせけり。さて松市、二人を伴ひて、羽黒山あゆき、御



山近き處の家に入りて、此御山も、千三郎と云ふ者のある
を知り給はずやと問ふも、主人答へて、我年頃此地に住み
て、日々御山にも参れども、然る人ありとも、聞侍らず。但し、
山千三、又と天狗千三とも、云ふ者ありて、常は神の御使を
して、日本國中、唐、天竺までも、空をかけりてゆくこといへ
ど、其人を見し者として、更ななし。御身が尋ぬるは、よも然
る人あり、あらざるべしと云ふ。三人、いと奇く思ひければ、
尙、御山より上りて聞かむと、俱より上りゆき、御坊に入りて問
ひけるに、坊主の給ふも、此御山も然る人あり。されど其人
は、人間界を放れて、尊き神佛も、仕ふる人なれを、修驗神職
と云ふことも、行の足らはぬあり、目もふる、事もなし。まして
こなみたち、いふ俗縁ありとも、逢見む事は叶ひ難しと
云ふ。松市等本意なく思へど、さていせんすべあしと思ひ

あきらめ、唯御山の神を、幾度もなく伏し拜みて、家へ歸り
けり。それより母を伴ひて新瀉ゆき、主人の恵みあて、雜
穀店を開き、家號を羽黒屋と唱ひて營業しけるに、日なら
ず繁昌あければ、妻をむるへ、男子二人、女子一人を生み、今
は長男に家業を譲り、松市の隱居して、今年八十六歳と
なりぬと聞く、世に、あやしき事も、あるものなりけりと
云へり。

右東國俚談より採りて、本傳に載せたり。嚴夫云ふ。仙に
五等あり。法に三成ありと、仙の五等は、鬼仙、人仙、地仙、神
仙、天仙の五つ、此れなり。法の三成は、大成、中成、小成の三
つ、此れあり。仙を求むるもの、小成に安ずれば、鬼仙とな
り、人仙となるあり。中成に安ずれば、地仙となり。進んで
大成に至るもの、始めて神仙となり。天仙とあることを



(七)



五
真

得べし。而して鬼仙は、鬼を離れず。人仙の人を離れず。地仙に至りては、此大地、上何れの處にも、至らずと云ふことなく、自由の妙道を能くす。神仙も天地に通じ、天仙の天職に任ず、今、此羽黒山千三仙人の如きは、假りに松市に化し、且神の御使として、日本國中、唐、天竺までも、空を翔りてゆくと思ふに、蓋し地仙の道を得たるものなるべし。

明治三十八年五月三日

明治三十九年七月廿八日印刷
明治三十九年七月卅一日發行

(非賣品)

編輯兼 發行者 三山神社々務所

山形縣東田川郡手向村

右代表者

安藤太美彌



山形縣東田川郡手向村

印刷者 山田保吉

山形縣西田川郡鶴岡町
馬場町甲貳番地

印刷所 保全堂

全上

